



## ヘルスコミュニケーションウィーク 2023～福島～ 第3回日本ヘルスリテラシー学会学術集会報告

奥原剛

同大会長、東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野

本集会では「理解しやすく行動しやすい健康医療情報の研究と実践：リーダビリティと PEMAT」と題したシンポジウムを開催しました。米国の *Healthy People 2030* はヘルスリテラシーの定義を更新し、「個人のヘルスリテラシー」に加え「組織のヘルスリテラシー」に言及しています。組織のヘルスリテラシーは、すべての人々が公平に、健康に関する情報とサービスを見つけ、理解し、活用できるように、医療・公衆衛生の側が組織的に取り組む重要性を示しています。つまり、市民・患者に向けて、理解しやすく行動しやすい健康医療情報を作成し発信することの重要性が、改めて明示されたといえます。この背景をふまえ、本シンポジウムでは、組織のヘルスリテラシーの要素のひとつである「情報提供」を対象にしました。

発表者と発表の概要は以下の通りです。

奥原剛（東京大学）「健康医療情報のリーダビリティから理解しやすさと行動しやすさを考える」

▶健康医療情報のリーダビリティ（可読性）に関する研究を紹介し、文章の読みやすさを切り口に、理解しやすく行動しやすい健康医療情報の作成について考察しました。

羽山慎亮（一般社団法人スローコミュニケーション、国立がん研究センター）「わかりやすい医療情報の国内外の取り組み」

▶日本語学の視点から健康医療情報の理解しやすさの研究・実践に取り組まれてきた羽山慎亮先生に、理解しやすい健康医療情報のガイドラインや事例を解説いただきました。

古川恵美（東京大学）「日本版 PEMAT（The Patient Education Materials Assessment Tool）の活用」

▶健康医療情報の理解しやすさと行動しやすさの評価ツールである PEMAT 日本版を活用した、健康医療情報の評価と改善について解説いただきました。

羽山先生は知的障害者を対象とした健康医療情報を中心に研究と実践をされています。知的障害のある方々はみずから声を上げることが難しく、医療・公衆衛生の側から改善を進めていかなくてはならない、とても重要な分野だと思います。古川先生は日本版 PEMAT の開発者で、既にいくつかの研究グループから日本版 PEMAT の活用について相談を受けておられます。本シンポジウムを開催できて私が個人的に嬉しく思えたことは、羽山先生と古川先生の若いお二人（30歳前後？）に発表いただけたことでした。お二人ともおそらくシンポジストとしての発表は初めての経験でおられたと思いますが、とても堂々とご自身のご研究、ご経験、お考えを発表されていて、頼もしく感じました。質疑応答の時間に、フロアの皆様から建設的なご意見、ご質問をいただけたことを、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

それぞれの発表の詳細が 2024 年 4 月に発行予定の日本ヘルスリテラシー学会誌に掲載されますので、お読みいただけますと幸いです。